

旺文社文庫

三四郎

(他) 落 第

夏目漱石著



に連載。完結後、南画風の水彩画に熱中した。

(大正三) 四七歳。一月、『行人』を大倉書店から刊行。四月から八月まで、『ところ』を「朝日新聞」に連載した。九月中旬、四度目の胃潰瘍のため約一か月病臥。十月、『ところ』を岩波書店から刊行。十一月二十五日、学習院で「私の個人主義」と題して講演した。この年から翌年にかけて、良寛の書に傾倒した。

(大正四) 四八歳。一月から二月まで、『硝子戸の中』を「朝日新聞」に連載。三月、京都に旅行したが、胃病が悪化し寝込んだ。六月から九月まで、『道草』を「朝日新聞」に連載。一〇月、『道草』を岩波書店から刊行。十一月、林原耕三の紹介で、芥川龍之介、久米正雄が門下生になった。

六 (大正五) 四九歳。一月一八日から二月一六日まで、リユーマチ療養のため、湯河原の天野屋に転地。四月、糖尿病と診断され、約三か月間、真鍋嘉一郎の治療をうけた。五月中旬、胃のぐあいが悪く寝込んだ。同二六日から「明暗」を「朝日新聞」に連載。かたわら、書画をかき、漢詩を作った。十一月二二日、胃潰瘍の病状が悪化。二八日、大内出血。二月二日、再度の大内出血で絶対安静、面会謝絶となった。九日、午後六時四五分、死去。一〇日、東京帝国大学医科大学で、長与又郎執刀のもとに解剖された。一二日、青山斎場で葬儀。導師は釈宗演。戒名は文献院古道漱石居士。二八日、雑司が谷墓地に埋葬された。「明暗」は一四日まで連載され、未完に終わったが、翌年一月、岩波書店から漱石遺著として刊行された。

の詩進出

一九四 第一次世界大戦おこる、日本ドイツに宣戦布告「道程」高村光太郎 「三太郎の日記」阿部次郎 人格主義・教養主義唱道さる

一九五 中国に対し二一カ条要求 株式暴騰・戦争景気はじまる

「山椒大夫」森鷗外 「その妹」武者小路実篤 「宣言」有島武郎

情話文学流行

一九六 タグール来朝 「波江抽斎」

「高瀬舟」寒山拾得 森鷗外

「鼻」辛粥 芥川龍之介 「善

心悪心」里見弾 「腕くらべ」

永井荷風 「貧しき人々の群」

宮本百合子 「出家とその弟子」

倉田百三 歴史小説流行 芥

川ら、新現実主義文学出現 文

学に宗教的傾向現われる 上田敏死去

旺文社文庫

三 四 郎

(他)落第

夏目漱石著

旺文社

目次

三四郎
落第

解説

漱石の人と文学

「三四郎」について

「三四郎」の鑑賞

「落第」について

三四郎の後輩

漱石先生の来訪

代表作品解題

参考文献

年譜

吉田精一

森木義彰
もりやまよしあき内田百閒
うちだひゃくけん

挿絵

賀茂牛之

三四郎	三二
落第	三二
解説	三三
漱石の人と文学	三三
「三四郎」について	三七
「三四郎」の鑑賞	三三
「落第」について	三六
三四郎の後輩	三九
漱石先生の来訪	三四
代表作品解題	三四
参考文献	三四
年譜	三四
挿絵	三九
賀茂牛之	三九

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこな
わない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。
また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

(編集部)

三
四
郎

うとうととして眼がさめると女はいつの間にか、隣の爺さんと話を始めている。この爺さんはたしかに前の前の駅から乗った田舎者である。発車間ぎわに頓狂な声を出して、駆け込んで来て、いきなり肌を抜いだと思つたら背中にお灸の痕がいっぱいあったので、三四郎の記憶に残っている。爺さんが汗をふいて、肌を入れて、女の隣に腰をかけたまでよく注意して見ていたくらいである。

女とは京都からの相乗りである。乗った時から三四郎の眼についた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移って、だんだん京大阪へ近づいてくるうちに、女の色が次第に白くなるのでいつの間にか故郷を遠のくような憐れを感じていた。それでこの女が車室にはいつて来た時は、なんとなく異性の味方を得た心持ちがした。この女の色は実際九州色であった。

三輪田のお光さんと同じ色である。国を立つ間ぎわまでは、お光さんは、うるさい女であった。そばを離れるのが大いにありがたかった。けれども、こうしてみると、お光さんのようなものも決して悪くはない。

ただ顔立ちから言うと、この女のほうがよほど上等である。口に締りがある。眼がはっきりしている。額がお光さんのようにだだっ広くない。なんとなくいい心持ちにでき上がっている。それで三四郎は五分に一度ぐらいいは眼を上げて女のほうを見ていた。時々女と自分の眼が行きあたるこ

ともあった。爺さんが女の隣へ腰をかけた時などは、もっとも注意して、できるだけ長いあいだ、女の様子を見ていた。その時女はにこりと笑って、さあおかけと言って爺さんに席を譲っていた。それからしばらくして、三四郎は眠くなって寝てしまったのである。

その寝ているあいだに女と爺さんは懇意こんいになって話を始めたものとみえる。眼をあげた三四郎は黙って二人の話を聞いていた。女はこんなことを言う。――

小供こどもの玩具おもちゃはやっぱり広島より京都のほうが安くっていいものがある。京都でちょっと用があつて下りたついでに、蛸薬師たこやくしのそばで玩具を買って来た。久しぶりで国へ帰って小供にあうのはうれしい。しかし夫の仕送りがとぎれて、しかたなしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉くれにいてながら海軍の職工をしていたが戦争中は旅順りょじゆんのほうに行っていた。戦争がすんでからいったん帰つて来た。間もなくあっちのほうに金が儲もうかると言つて、また大連たいれんへ出稼でかせぎに行った。始めのうちは音信たよりもあり、月々のものも几帳面ちやんめんと送つて来たからよかつたが、この半歳はんとしばかり前から手紙も金もまるで来なくなつてしまった。不実な性質たしなではないから、大丈夫だけれども、いつまでも遊んで食べているわけには行かないので、安否のわかるまではしかたがないから、里へ帰って待っているつもりだ。

爺さんは蛸薬師も知らず、玩具にも興味がないと見えて、始めのうちにはただはいはいと返事だけ

(1) 京都の新京極にある薬師如来を祭つた堂。(2) 広島県西南部の都市。もと、軍港があつた。(3) 中国の遼東半島南端にある港市。日露戦争で日本の軍港となった。(4) 遼東半島先端の南岸にある港。現在は旅大市に含まれる。日露戦争後、清から租借し、日本の統治下にあつた。



していたが、旅順以後急に同情を催して、それは大いに気の毒だと言ひ出した。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとう彼地で死んでしまった。いったい戦争はなんのためにするものだからかわらない。あとで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる。こんな馬鹿げたものはない。世のいい時分に出稼ぎなどというものはなかった。みんな戦争のおかげだ。なにしろ信心が大切だ。生きて働いているにちがいない。もう少し待っていればきっと帰って来る。——爺さんはこんなことを言つて、しきりに女を慰めていた。やがて汽車が止まったら、では大事にと、女に挨拶をして元気よく出て行つた。

爺さんに続いて下りたものが四人ほどあつたが、入れかわつて、乗つたのはたった一人しかない。もとから込み合つた客車でもなかつたのが、急に淋しくなつた。日の暮れたせいかもしれない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯のついた洋燈を挿し込んでゆく。三四郎は思い出したように前の停車場で買った弁当を食い出した。

車が動き出して二分もたつたらうと思うころ例の女はすうと立って三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。この時女の帯の色がはじめて三四郎の眼にはいつた。三四郎は鮎の煮浸しの頭をくわえたまま女の後姿を見送つていた。便所に行つたんだなと思ひながらしきりに食つてゐる。

女はやがて帰つて来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもう仕舞掛である。下を向いて一生懸命に箸を突ッ込んで二口三口頬張つたが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思つて、ひょいと眼をあげて見るとやっぱり正面に立つていた。しかし三四郎が眼をあげると同

(1) いろいろの品。転じて、物価。(2) 焼いてから、醬油・味噌で柔らかく煮たもの。(3) 終わりに近いこと。

時に女は動き出した。ただ三四郎の横を通って、自分の座へ帰るべきところを、すぐと前へ来て、からだを横へ向けて、窓から首を出して、静かに外をながめ出した。風が強くあたって、鬢がふわふわするところが三四郎の眼にはいった。この時三四郎はからになった弁当の折を力いっぱい窓からほうり出した。女の窓と三四郎の窓は一軒おきの隣であった。風に逆らって投げた折の蓋が白く舞いもどったように見えた時、三四郎はとんだことをしたのかと気がついて、ふと女の顔を見た。顔はあいにく列車の外に出ていた。けれども女は静かに首を引っ込めて更紗の手帛で顔のところを丁寧（ていねい）にふき始めた。三四郎はともかくもあやまるほうが安全だと考えた。

「ごめんなさい」と言った。

女は「いいえ」と答えた。まだ顔をふいている。三四郎はしかたなしに黙ってしまった。女も黙ってしまった。そうしてまた首を窓から出した。三、四人の乗客（じようかく）は暗い洋燈（ランペン）の下で、みんな寝ぼけた顔をしている。口をきいているものはだれもない。汽車だけがすさまじい音をたてて行く。三四郎は眼をつぶった。

しばらくすると「名古屋はもうじきでしょうか」と言う女の声が出た。見るといつの間にか向き直って、及び腰（おびこし）になって、顔を三四郎のそばまで持ってきて来ている。三四郎は驚いた。

「そうですね」と言ったが、はじめて東京へ行くんだからいっこう要領を得ない。

「このぶんでは遅れますでしようか」

「遅れるでしよう」

(一) 中腰になって、体をかがめること。

「あんたも名古屋へお下りで……」

「はあ、下ります」

この汽車は名古屋どまりであった。会話はすこぶる平凡であった。ただ女が三四郎の筋向こうに腰をかけたばかりである。それで、しばらくのあいだはまた汽車の音だけになってしまう。

次の駅で汽車がとまった時、女はようやく三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと言いだした。一人では気味が悪いからと言って、しきりに頼む。三四郎ももともとだと思つた。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかった。なにしろ知らない女なんだから、すこぶる躊躇したにはしたが、だんぜん断わる勇氣も出なかつたので、まあいいかげんな生返事をしていた。そのうち汽車は名古屋へ着いた。

大きな行李は新橋まで預けてあるから心配はない。三四郎は手ごろなズックの革靴と傘だけ持って改札場を出た。頭には高等学校の夏帽をかぶっている。しかし卒業したしに徽章だけはもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい。うしろから女がついて来る。三四郎はこの帽子に対して少々きまりが悪かった。けれどもついて来るのだからしかたがない。女のほうでは、この帽子をむろんただのきたない帽子と思つている。

九時半に着くべき汽車が四十分ほど遅れたのだから、もう十時はまわっている。けれども暑い時分だから町はまだ宵の口のようににぎやかだ。宿屋も眼の前に二、三軒ある。ただ三四郎にはちと立派すぎるように思われた。そこで電気燈のついている三階作りの前をすまして通り越して、ぶら

ぶら歩いて行った。むろん不案内の土地だからどこへ出るかわからない。ただ暗いほうへ行った。女はなんとも言わずについて来る。すると比較的淋しい横町の角から二軒目に御宿という看板が見えた。これは三四郎にも女にも相応なきたない看板であった。三四郎はちょっと振り返って、一口女にどうですと相談したが、女は結構だというんで、思いきってずっとはいった。上がり口で二人連れではないと断わるはずのところを、いらっしやい、——どうぞお上がり——御案内——梅の四番などのべつにしゃべられたので、やむをえず無言のまま二人とも梅の四番へ通されてしまった。

下女が茶を持ってくるあいだ二人はほんやり向かい合ってすわっていた。下女が茶を持って来て、お風呂をと言った時は、もうこの婦人は自分の連れではないと断わるだけの勇気が出なかった。そこで手拭をぶら下げて、お先へと挨拶をして、風呂場へ出て行った。風呂場は廊下の突き当たりで便所の隣にあった。薄暗くって、だいぶ不潔のようである。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考えた。こいつは厄介だとじゃぶじゃぶやっていると、廊下に足音がする。だれか便所へはいった様子である。やがて出て来た。手を洗う。それがすんだら、ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入口から、「ちいと流しまししょうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、「いえたくさんです」と断わった。しかし女は出て行かない。かえってはいって来た。そうして帯を解き出した。三四郎といっしょに湯を使う気とみえる。別に恥ずかしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽を飛び出した。そこそこだからだをふいて座敷へ帰って、座蒲団の上にすわって、少なからず驚いていると、下女が宿帳を持って来た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡県京都真崎村小川三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女

のところへいってまったく困ってしまった。湯から出るまで待っていればよかったと思つたが、しかたがない。下女がちゃんと控えている。やむをえず同県同郡同村同姓花二十三年とでたらめを書いて渡した。そうしてしきりに団扇うちわを使つていた。

やがて女は帰つて来た。「どうも、失礼いたしました」と言っている。三四郎は「いいや」と答えた。

三四郎は革靴かぽんの中から帳面を取り出して日記をつけ出した。書くこともなにもない。女がいなければ書くことがたくさんあるように思われた。すると女は「ちよいと出て参ります」と言つて部屋を出て行つた。三四郎はますます日記が書けなくなった。どこへ行つたんだろうと考え出した。

そこへ下女が床とこをのべに来る。広い蒲団ふとんを一枚しか持つて来ないから、床は二つ敷かなくてはいけないと言つと、部屋が狭いとか、蚊帳かやが狭いとか言つてらちがあかない。めんどうがるようにもみえる。しまいにはただいま番頭がちょっと出ましたから、帰つたら聞いて持つて参りましようと言つて、頑固がんこに一枚の蒲団を蚊帳いっぱいに敷いて出て行つた。

それから、しばらくすると女が帰つて来た。どうもおおそくなりましてと言つ。蚊帳のかけでなにかしているうちに、がらんがらんという音がした。小供こどもにみやげの玩具おもちゃが鳴つたにちがいない。女はやがて風呂敷包みを元のとおりに結んだとみえる。蚊帳の向こうで「お先へ」と言う声でした。三四郎はただ「はあ」と答えたままで、敷居しきに尻を乗せて、団扇を使つていた。いっそのままで夜を明かしてしまおうかとも思つた。けれども蚊がぶんぶん来る。外ではとてもしのぎきれない。三四郎はついでと立つて、革靴かぽんの中から、キャラコの襯衣ソックスと洋袴ズボン下を出して、それを素肌すはだへ着けて、

その上から紺の兵児帯を締めた。それから西洋手拭を二筋持ったまま蚊帳の中へはいった。女は蒲団の向こうのすみでまだ団扇を動かしている。

「失礼ですが、私は痲痺で他人の蒲団に寝るのが嫌だから……少し蚤除けのくふうをやるからごめんさい」

三四郎はこんなことを言つて、あらかじめ、敷いてある敷布の余っている端を女の寝ているほうへ向けてぐるぐる捲き出した。そうして蒲団のまん中に白い長い仕切りをこしらえた。女は向こうへ寝返りを打った。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、その上に細長く寝た。その晩は三四郎の手も足もこの幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかった。女とは一言も口をきかなかつた。女も壁を向いたままじっとして動かなかった。

夜はようよう明けた。顔を洗つて膳に向かつた時、女はにこりと笑つて、「ゆうべは蚤は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「ええ、ありかとう、おかげさまで」というようなことをまじめに答えながら、下を向いて、お猪口の葡萄豆をしきりに突ツつき出した。

勘定をして宿を出て、停車場へ着いた時、女ははじめて関西線で四日市のほうへ行くのだということと三四郎に話した。三四郎の汽車は間もなく来た。時間の都合で女は少し待ち合わせることもなかつた。改札場の際まで送つて来た女は、

「いろいろご厄介になりました、……ではごきげんよう」

と丁寧にお辞儀をした。三四郎は革靴と傘を片手に持ったまま、あいた手で例の古帽子を取つて、

- (1) 激しやすい性質。(2) ここでは、つまみを入れる小さい皿。(3) えんどう豆。